



國文

◎悲しき大みゆき

文科一部二年 關 みさを

覺束なかりし秋の空、いとよく晴れて喪にやつれたる青人草の面きはだちて悲し。黒き幕はり渡し、弔燈、弔旗ゆらぎたる喪の町は人のさめきもなく、篝のこゝかしこ高やかに盛られて天が下みな黒み渡ると書きし古のふみ目のあたり見る今日はうらみ長月の十三日。和田倉門を入りて數多の學生のふむ砂の音も力なげに、各々定められたる芝生につく。我等が芝生は長くも二重橋いとけ近く、玉垣一重をへだて、は宮々のおまへさへおはしますものを。

芝生に坐りて靜かに大内のみ空仰ぎて、かへらぬ御事ども慕ひまつるに、又更に涙こそ涌き來れ。悲しげに大宮の木の間をたゆたひし夕陽は、篝火のもえ出づる程、堪へ難げに打ちふるひつ、やう／＼に沈みゆく。日の入る方やあゝとはの大宮所、山柵に匂へる空には夢の如く細き三日の月かゝりて、篝火の色赤うなりゆくに、悲風蕭々として松ヶ枝挽歌の響を立て、打ち並ぶ騎兵が紅白の旗のはたはたとはたゝく音よ、諒闇に沈む人々の胸をさして、そゝろ身にしむ許りなるを、折しもあれ突如として流星一つ、宮城の方より來りて星まれなる空を南へ、引きはへたる尾のうする、匂ひに、あぐる眸の力なき哉。あはれあはれ慕ひ奉る先帝陛下の御魂は遠く天

つ國へと神さらせ給ひぬ。

夜色は迫りぬ、黒き喪服の色して、眞神にはのゆらげる白妙の木綿幣をつゝみぬ。天地寂として悲しき沈黙は振足してさ迷ふ中を「哀の極」は神の息吹と軍樂隊の間より起り、泣くが如く訴ふるが如き其旋律は波紋の様に廣がり渡れり。八時といふに弔砲一發、七千万の胸を破れば一齊になり出づる寺々の鐘、海も山もさげよと。大御柩は今を殯の宮を出てまして遠き神路に上らせ給ふらし、木の間がくれに灯の見える、やがて二重橋の方、白き御旗いく流、赤まつごも、涙の色を漂はせて、しづ／＼と浮び出づる、天の浮橋に天降り給ひけむ昔のねたくも悲しきに俗人が奏でまつる万秋樂の哀音、細く長く限りなき思をこめて、あはれ近づき來る音の……大御柩は靜かなる音立て、渡り給ひぬ。花やかに輝く御屋根の匂の聊か人のひまより洩りをろがみまつりしこそ畏かりしか。かくて靈輦はなづさひ給ひし玉の宮居を離れましぬ。御後慕ひまゐる赤子の金モールは天つ空の銀河とまがひ

禮帽の白き毛は秋のすゞさをよげど、何も／＼色なき心地する哉。御葬列二時間許りもやつ／＼かせ給ひつらむ。夢見心地のはかなさは、たいもの靜かなる御けはひにそれと推し奉るのみ。悲しき夜の更たけて大内山は愁の靄に包まれ、紫色のアークライトと赤き篝火と空しき路を照し、人去つて初秋の氣しめやかなり。

◎慈善

文科一部 一年 中島 ヒサ

都の人は鄙に、鄙の人は都に曳く杖の音も賑ふ花の一日、靜なる二階の四疊半に坐して、押入の奥深く藏めしつづら取り出し、亡き兄のかたみの書物など拾ひ讀みせる折しも、手にしたる一書の中より舞ひ落ちし一葉の繪あり。何心なく手に取れば、これぞ鈴木今右衛門の娘が飢饉に際し、己が著たる上著を脱ぎて貧女に與ふるの狀を書きしものにて、上欄に「博愛衆に及ぼし」を微なる金文字にて書かれたるが讀まれぬ。こはわが幼かりし時精勤の賞として師より賜はり